

『虞美人草』 英語的日本語 Picturesque

Junko Higasa 2013.10.21

夏目漱石作『虞美人草』第十九章に『凝る雲の底を抜いて、小一日空を傾けた雨は、大地の髓に浸み込むまで降って歇んだ』という一文がある。これはこの小説のベースにあるシェイクスピア作『アントニーとクレオパトラ』（第五幕第二場）の次の一文の転化だと思う。「Dissolve, thick cloud, and rain; that I may say, The gods themselves do weep!」これを「溶ける、厚い雲よ、雨となれ；神々が涙を流していると言えるように！」と訳して気がついた。雲は水蒸気の凝集体である。その中で水滴が大きくなると落下する。その間に消滅せずに雲底を抜けてくる粒だけを雨という。漱石は科学的根拠を踏まえた上で、何と感覚的に趣のある表現をしているのだろう。そう思ったとき改めて気づいた。『虞美人草』第八章。藤尾と母の「茶」の場面を、趣ある美しさで包んだ後で、自然派なら当然二人の心の醜さへ展開させるところを漱石はかわした。『二人の対話は少なくとも前段より趣がなくてはならぬ』これぞ漱石が自然派に向けて意識的に語った Picturesque(美しい絵、趣のある文章)の原理、主張なのだ。

それから「凝る雲の…」を英文と照らし合わせて初めて気づいた。不思議に思っていた「眼を眠る」という漱石の日本語表現は「sleeping eyes」なのだ。そうか、成程英文学者の頭。それに漢学の知識が加わるから、これだけ内容深く趣ある表現になるのだ。